創刊号
学校法人 実践女子学園
下田歌子研究所 ニューズレター No. 01
2014年6月

ニューズレター刊行にあたって

理事長
井原　徹

私は、私立大学は「志立大学」（志で立つ大学）でなければならないと考えています。私学における創立者は、強烈で熱い思いを持って私財を投げ打って学校を創りました。社会に対して、どの分野でどのような役割をもって貢献するか、創立者は高い志を持って私学を創っています。

実践女子学園は、明治時代を代表する女子教育者・下田歌子が、当時、男性中心の社会にあって、「日本の未来を創るのは庶民の家庭の子女である。女子教育こそ、これからの日本の礎（いしずえ）である。」と高らかに宣言して、1899年に麹町に創立した「帝国婦人協会私立実践女学校・女子工芸学校」を淵源（えんげん）とします。当学園の「建学の精神」はそこにあります。

下田歌子は、広域で実践主義に裏打ちされた業績をもって、女性の社会や家庭での活躍を支援し、女性の地位向上に大きく寄与しました。まさに明治の時代から「男女共同参画」を推進していたといえます。

下田歌子は、和歌の達人であり、源氏物語の名講義で知られた「国文学者」でありました。同時に、日本で初めて家政学の教科書を編纂した「家政学者」でありました。さらに福祉事業や女性教育の実践者である「社会学者・教育者」でもありました。当学園は、大学において、そのような下田歌子の実績を踏まえて、「文学部」「生活科学部（家政学部）」「人間社会学部」を置き、教育を展開しています。学園はこのように、下田歌子の業績や志に触れる範囲内で事業を展開し、社会的責任を果たしてきました。

いま、社会では価値観の凄まじいばかりの多様化と、そのことから生じる身勝手な振る舞いが、男女や年齢層を問わず目につくようになりました。このような時にこそ、下田歌子の「女性の清らかな徳性と豊かな情操をもって、社会の弊を正せ」という言葉をもって学生、生徒を教育し、社会と関わり、また、そうした理念で男女共同参画を推進することが大切だと思っています。同時に、ならばこそ、「品格高雅にして自立自営し得る女性の育成」を目指した教育の展開に、学園全体が全力で取り組んで行かなければならないとも思っています。そして、下田歌子の究極の目的・志である「男女共同参画」の推進の一番手の旗手になることこそ、学園の使命であると自覚しています。

学園は、本年4月から学園附置の「下田歌子研究所」を創設しました。この研究所において、下田歌子の業績や思想を掘り起し、集大成し、理論構築すること等の基礎研究を行います。また、この研究所と連携しながら、全学的に学生、生徒に対しても、現に生きる女性として、どのような考え方でどのような活動をすべきかを、教育現場で学生たちに考えてもらいます。このことによって、男女共同参画社会の推進に大きく寄与できると確信しています。

このニューズレターは、研究所の活動・研究内容を関係の皆様にタイムリーにお届けし、事業活動へのご理解とご支援をいただくためのものです。加えて、下田歌子を研究するということは、ひとり実践女子学園のためだけではありません。皆様のご教示、ご提案等をいただき、下田歌子研究を共有することによって、広く我が国の男女共同参画を後押ししていきたいと思います。

実践女子学園下田歌子研究所の目指すもの

下田歌子研究所　所長
湯浅　茂雄

下田歌子は、明治時代、未だ女性の社会的な地位がほとんど問題とされなかった状況において、いち早く女性の社会的な地位向上を目指し、その基礎が女子教育にあることを見抜き、確信し、実践した人物でありました。

その最初の拠点の一つとして、明治32年（1899年）に実践女子学園が創立されたわけですが、下田歌子はその後も、次々と各地の女子教育機関の創立に深く関わっていきます。ここで大切なことは、実践女子学園は、下田の目指したものを実現するための、あくまでも拠点の一つであり、スタートであったということです。実践さえよければいいというものでは決してありません。一つの女子教育機関の個別の問題を大きく超えたところにある、下田歌子の目指したものの大きさと強さを、当研究所も受け継いでいきたいと思います。

したがって当研究所の一つの事業の柱として、下田歌子の目指したものをより一層明らかにし、下田歌子の新たな思想・業績を掘り起こすために、新たな資料の収集と並行しながら、その事跡・著作等の調査研究を精力的に行い、その成果を発信していきたいと思います。

以上は歴史的な研究と言えましょうが、もう一つの研究所の大きな事業、活動の柱として、下田歌子が目指したものを踏まえ、現在・未来において女性たちがよりいきいきと活躍できる社会の構築を目指し、それに資する施策・思想を広く社会に発信していきます。具体的には、男女共同参画社会の実現と女性のキャリア支援に関する活動に取り組んでいきます。すなわち、女性の多様なライフステージ全般を視野に、女性が元気に活躍することができる社会の実現を目指し、教育や支援に関する調査・研究を行い、学園内外に対して積極的な発信・提言をしていきます。また、これと関連させながら、女子教育のあり方に関する調査・研究も進めていきます。

下田は欧米女子教育視察の途上、一般の女子教育事業の確信に至り、書簡のなかでその計画を「百年の長計」と表現しています。私は下田の「百年の長計」は今もその途上にあると考えています。下田が女子教育に関わった時代は明治・大正・昭和に渡りますが、下田はその時代、その状況において必要とされる女性の生き方を具体的に提案し、女性を応援し続けました。女性を取り巻く社会的な環境が変わっていく以上、下田の「長計」は終わることはありません。本研究所が男女共同参画社会の実現と女性のキャリア支援に関する活動に取り組むことは、「百年の長計」の志を継承することに他なりません。

また、当研究所は、外部の他の女性教育機関や、男女共同参画や女性のキャリア支援を推進する機関との連携を積極的に図ってまいります。「拠点の一つ」としてネットワークを広げ、その中心的な役割を担うことを目指していきます。

最後になりますが、このニューズレターは、情報発信の即時性に重きを置き、年3回の刊行を予定しています。刊行物としては他に下田歌子研究所年報を年度末に刊行します。この二つの刊行物は学園内外に開かれたものとして、下田歌子や学園史、女子教育、男女共同参画、女性のキャリア支援に関する内容について、みなさまの投稿を大いに歓迎いたします。

スタートしたばかりの研究所ではございますが、みなさまにおかれましては、様々な情報、ご要望、ご意見をいただくなど、お力添えを賜りますようお願い申しあげます。

思想家・下田歌子を研究するということ

下田歌子研究所　主任研究員
伊藤　由希子

アベノミクスの「成長戦略」で、「女性が輝く日本」を標語に、女性の社会進出が重要課題のひとつにあげられていることは、ご存知のとおりです。その前提とも言える男女共同参画社会基本法もふくめ、いま、女性の生き方――女性がいきいきと生きるとは、具体的にはどういうことなのか――があらためて問われてきていますが、下田歌子が明治・大正という時期に目指していたのは、いままさに目指されているもの、「男女が、社会の対等な構成員として、自らの意思によって社会のあらゆる分野における活動に参画する機会が確保され、もって男女が均等に政治的、経済的、社会的及び文化的利益を享受することができ、かつ、共に責任を担うべき社会を形成する」（男女共同参画社会基本法）ことであったとも言えるように思います。

しかし、男性とは異なる女性の特質を重視し、「賢母良妻」を女性のひとつのあり方として提示したこともあり、下田は、近代国家に女性を効率よくからめとっていくために持ち出されてきた「良妻賢母」論者の典型として批判されることも多くありました。

たしかに「良妻賢母」という考え方には、現在から見れば批判的評価を受けるような側面があったことは事実です。しかし、下田自身が望んでいたのは、あくまで、明治・大正というあらたな時代にふさわしい「立派な理想的日本婦人が沢山出来て」くることであり、そのために「古より今に至るまでの、吾が日本女性の長所短所――特に長所に注意し、――を子細に調査研究して、そして其の長所を失はざらしめ、以つて新来の外国思想文物の優良なるに混和し補足」しようとしていたのであって、決してひたすらに旧態依然の封建的女性像を押しつけようとしていたのではありませんでした。

政治学者であり日本思想の研究者であった丸山眞男が、「過去の伝統的な思想の発掘を問題にする場合に、われわれはその思想の到達した結果というものよりも、むしろその初発点、孕まれて来る時点におけるアンビヴァレントなもの、つまりどっちにいくかわからない可能性、そういったものにいつも着目することが必要であります」（「思想史の考え方について」）と述べているように、男性ではなく女性である下田が、男性や教科書からの受け売りではなく、幼年時代からの漢学や儒学の素養、さらには日本文学の広く深い研鑽に加え、早い時期に単身英国留学を果たしたこともふくめ、西洋文化の歴史、社会、経済、国際情勢等、幅広い分野にわたる、当時では最先端の見聞・学識を背景に、時代に見合った女性のあり方を考えていたことの「可能性」を掘り起こしてみること、つまり、思想家としての下田歌子にいまあらためて注目し、その思想の内実がいかなるものであったかを探ってみる意義はあるのではないかと、私は考えています。

従来の日本女性のあり方を研究し、特にその長所をふまえながら、そこに外国からあらたに入ってきたもののよい点を合わせることで、あらたな時代の女性像を作りあげていこうという下田の基本的姿勢は、いわば、〝故きを温ねて新しきを知る〟という姿勢です。過去のひとびとの生き方を見つめながら、その中で、いまに、未来に活かせるものは活かし、他の国や文化の善い部分があれば、それらを積極的に採りいれながら、その時代にふさわしい女性（男性）の生き方を探っていく――。それは現代のわたしたちが下田に学ぶべき姿勢であり、思想家としての下田歌子を研究することの意義も、そこにあるのではないかと思っています。

下田歌子研究所開所記念シンポジウム

「下田歌子と現代女子教育」

実践女子学園の創立者である下田歌子は、明治・大正の新たな時代にふさわしい女性の生き方を模索し、ひとびとに示そうとしました。実践女子学園は2014年4月、下田の精神に学び、現在・未来において女性たちがよりいきいきと活躍できる社会の構築を目指し、下田歌子研究所を開設いたしました。

これを記念し、現代女子教育のあり方、そして現代・未来の女性の生き方を考えるシンポジウムを開催いたします。

詳細は下田歌子研究所HPをご覧ください（HP　http：//www.jissen.ac.jp/shimoda/）。

みなさまのご来場をお待ちいたしております。

下田歌子研究所開所記念シンポジウム

「下田歌子と現代女子教育」

2014年7月12日（土）
14：00 - 17：00（開場13：30）
実践女子大学渋谷キャンパス　創立120周年記念館 403教室
※先着360名／入場無料・事前申込不要

基調報告　**「下田歌子と現代女子教育」**
竹内 整一（東京大学名誉教授）
長野県出身。専門は倫理学、日本思想史。日本倫理学会会長。著書、『「おのずから」と「みずから」』、他。

パネリスト　**「女子大学と男女共同参画」**
羽入 佐和子（お茶の水女子大学長）
神奈川県出身。専門は哲学。国立大学協会副会長などを務める。著書、『ヤスパースの存在論』、他。

「建学の精神と新しい女子大学の可能性」
福井 一光（鎌倉女子大学学長）
神奈川県出身。専門は哲学、比較思想。玉川大学教授などを務める。著書、『哲学と現代の諸問題』、他。

「下田歌子と実践女子学園」
湯浅 茂雄（下田歌子研究所所長）
東京都出身。専門は国語学。前実践女子大学学長。著書、『生まれることば 死ぬことば』、他。

コーディネーター　伊藤 由希子（下田歌子研究所主任研究員）
神奈川県出身。専門は日本思想史。東京大学死生学・応用倫理センター研究員などを務める。
著書、『仏と天皇と「日本国」』、他。

主催：実践女子学園 下田歌子研究所　　お問い合わせ：学校法人実践女子学園 総務部　TEL 042-585-8800

『ニューズレター』創刊号
発行：2014年6月　発行人：湯浅茂雄　編集人：伊藤由希子　発行所：学校法人 実践女子学園 下田歌子研究所
〒191-8510　東京都日野市大坂上4-1-1　電話・FAX：042-585-8945　E-mail：shimoda-ins@jissen.ac.jp
印刷：日野テクニカルサービス株式会社